

(資料)

## リチャール・ド・リゾン「ティベールの晩課」 (『狐物語』第 12 枝篇) の翻訳と注 (下)

高 名 康 文\*

(前稿に続く)

- 12246 さてや、二人は駆けに駆け、  
12247 弁じに弁じて、  
12248 ブラニーの町に入りました。  
12249 町の下野原で  
12250 本を下ろしました。  
12251 馬を放って  
12252 草を満足いくまで食べさせます。  
12253 それから教会へと向かいました。  
12254 もう夜になりかけており、  
12255 人びとは立ち去っていました。  
12256 二人はすぐさま教会に入りますが、  
12257 ランプに火が入れられ、  
12258 人びとが立ち去ってしまったところでした。  
12259 ルナールは言いました。「さあ、始めたまえ。  
12260 神にかけて、君は遅れ過ぎだ。  
12261 みな、晩課を聞かずに行ってしまったではないか。」  
12262 「ルナール殿、お気になさらず。  
12263 彼らには、たっぷりと晩課を聞かせてあげるから、

---

\* 福岡大学人文学部

- 12264 ろうそくを灯したまえ。」  
12265 ルナールは、  
12266 今や教会で儀式を始めなければならない、  
12267 新たにお勤めをしなければならぬと言います。  
12268 「では、内陣を囲む柵の扉を開きなさい。  
12269 もっとよくものが見えるようになるでしょう。  
12270 アンティフォナ<sup>32</sup>をやらなくてはならない。  
12271 この詩篇唱集<sup>33</sup>を手にとって  
12272 お前のお勤めに向かいなさい。  
12273 これらの唱句<sup>34</sup>、あの詩篇へと。」  
12274 ルナールは詩篇にとりかかって  
12275 巧妙にページを繰り出します。  
12276 そのあり様は語ることもできないでしょう。  
12277 二人はお勤めにとりかかり、  
12278 伴ながら立ち上がりました。  
12279 ティベールはスルブラ<sup>35</sup>をまとい、  
12280 祭壇へと飛び上がります。  
12281 ティベールは冠を脱いで  
12282 次のように始めました。  
12283 「主ヨ、我が昏ヲ...」

---

<sup>32</sup> 詩篇、カンティクム（聖務日課において歌われる詩篇以外の聖書のテキスト）の前後に歌われる反復句のこと。（J. Harper, *The forms and orders of western liturgy from the tenth to the eighteenth century*, Oxford, Clarendon paperbacks, 1991. pp. 69-71 及びに p. 78 以下と、この書物の邦訳 J. ハーパー著、佐々木勉・那須輝彦訳『中世キリスト教の典礼と音楽』、教文館、2000 年では、pp.103-05、及びに pp. 116-20 にあたる。）

<sup>33</sup> 詩篇とカンティクムを収めた本。（J. ハーパーの前掲書邦訳、「教会用語集」, p. 22 を参照）

<sup>34</sup> 斉唱聖唱、特に応唱型聖歌のなかで独唱される部分。（J. ハーパーの前掲書邦訳、「教会用語集」, p. 26 を参照）

<sup>35</sup> スータン（在俗聖職者が着用する長衣。一般的に色は黒で祭服の下に着用した）や聖職服の上に着る白いリネンの祭服。一般に袂がゆったりしていて、首まわりにヨークがあり、身の丈よりも多少短めに出来ている。（J. Harper, 前掲書, p. 316. 及びに、同著邦訳巻末の「教会用語集」, p.28 を参照）

- 12284 「(君に神のご加護あれ。)なんだそりゃ。  
12285 (君に神のご加護あれ。)(とルナールは言います。)  
12286 君が晩課のために唱えているのは  
12287 朝課の祈りじゃないか、この馬鹿者。」  
12288 ティベールは笑い出して  
12289 こう言います。「じゃあ、どうするのだね？」  
12290 「神ヨデ オール・イ ン・アディウトルリウム[我ヲ]助ケ給エと  
12291 (とルナールは答えます。)最初にまず  
12292 唱えなくては駄目ではないか<sup>36</sup>。  
12293 ティベールの旦那、お前さん、酔っ払っているのか？  
12294 さもなければ、典礼書のことは何も知らないということだ。  
12295 老いばれヨハネも、ダビッド師も  
12296 ラ・フォリーの司祭<sup>37</sup>も  
12297 お前さんの言うことを聞かなかったなんて、なんてこった。  
12298 連中が、俺と君が  
12299 こんな風に始めるのを

<sup>36</sup> 中世カトリックの典礼には、修道院と在俗教会による違いや地域差が存在したが、聖務日課は共通して詩篇から抜粋した短い一節を司式者と共唱団の間で互いに歌い交わすことから始まった。朝課の場合、司式者が詩篇 50, 17 の前半 "Domine labia mea aperies 主よ、我が唇を開き給え" (先唱句) を唱えると、共唱団が後半 "et os meum adnuntiabit laudem tuam さらば我が口、汝のほまれを表わさん" (応唱句) で応える(詩篇 62 の場合もあった)。その他の聖務日課では、詩篇 69 の冒頭が同様に先唱句 "Deus in adiutorium meum intende 神よ、我を救い給え" と応唱句 "Domine ad adiuvandam me festina 主よ、とく来たりて我を助け給え" に分けて唱えられた。(R. Taft, *La liturgie des heures en Orient et en Occident*, Brepols, 1991, p.216 及び p.304 と J. Harper の前掲書 p. 75 以下、同著の邦訳 p. 114 以下を参照)。すなわち、ルナールの指摘は、この時代の典礼様式に適ったものであるといえる。Ph. Walter は、動物による「我が唇を開き給え」という台詞に、聖書の文言を霊的な次元から即物的な次元に引き落とす効果を見る。「さらば、喰わん」という応唱句が隠されているというわけである。Ph. Walter はティベールによるとり違えをルナールによるものと誤読してはいるが、作者に典礼の文言をパロディーする意図があるという見解の正当性には影響はない。(Ph. Walter, «Renart le fol. Motifs carnavalesques dans la branche XI du *Roman de Renart*», in *Information littéraire*, 5 (1989), pp. 3-13, p. 6 を参照)

<sup>37</sup> La Folie は、現在のカルヴァドスのイジニーに実在する地名であるが、「狂気」という意味があり、本テキストが含意する「愚者の祭り」を想起させるものである。

- 12300 聞いたとして、  
12301 笑われないとも思っているのか？」  
12302 「馬鹿。お前さんを試すためにやったのだよ。  
12303 お前さんがそんなに物知りだとは  
12304 正直なところ、思っていなかった。  
12305 だけど、お前さんのことは十分に試した。  
12306 もし、僧服を着て  
12307 この町に留まりたいと望むのならば  
12308 たっぷりと十分の一税を与えさせるとしよう。」  
12309 ルナールは言います。「それはいいが、  
12310 晩課を歌いたまえ。遅れているぞ。」  
12311 するとティベールは帽子を被って  
12312 [晩課を]再開しました。  
12313 「デオー・イン・アディウート・リウム神ヨ[私ヲ]助ケ給エ」と唱えました。  
12314 ルナールは、アンティフォナを読み上げます。  
12315 二人は、声高々と別々のトーンで  
12316 詩篇や唱句を歌い上げました。  
12317 ティベール殿は  
12318 たいそう気高くアンティフォナを唱え、  
12319 全く気取りなく聖書の一節を朗読します。  
12320 ルナール殿の方は唱句を唱えます。  
12321 それから、二人は一語一語、一行一行  
12322 ととても正確に歌い上げました。  
12323 ルナール殿が唱句を唱えると  
12324 ティベール殿は答唱をしました。  
12325 マニフィカト<sup>38</sup>の  
12326 アンティフォナを猫のティベール殿が唱え、

---

<sup>38</sup> マリアの歌冒頭の言葉。「ルカによる福音書」に記された降誕物語にでてくる3つのカンティクムのうちの一つ。カトリック教会の晩課で歌われる。(J. Harper, 前掲書, p.305、及びに同著邦訳の「教会用語集」p.42を参照)

- 12327 ルナールが[マニフィカトを]見事に歌いいたします。  
12328 たいそう哀れみ深く歌い上げました。  
12329 それから二人で一緒に  
12330 アンティフォナを歌う(とみえます<sup>39</sup>)。  
12331 その後、ルナールは唱句を唱え、  
12332 ティベールがそれに対して答唱をします<sup>40</sup>。  
12333 続いてティベールが  
12334 「主ハ、アナタタチト共ニ」とたいそう美しく唱え、  
12335 ルナールが応唱句を唱え、  
12336 はっきりとした声で祈願をします<sup>41</sup>。  
12337 ティベールは、「世々ニ到ルマデ<sup>42</sup>」と唱えて  
12338 祭壇の前に跪きました。  
12339 ルナールは、「アーメン」と応えます。  
12340 それから、言いました。「立ち上がって  
12341 扉を閉めに行きたまえ。  
12342 私が我ヲ主ヲ賛美シ奉ラン<sup>43</sup>を唱えよう。」  
12343 三声の高低が交叉するオルガナム形式の<sup>44</sup>

<sup>39</sup> «si con moi sanble» の訳。これは語り手の介入。

<sup>40</sup> A 写本でこの二行は、「Tybert a dit apres le vers, / Renart li respont a envers.» (E. マルタン版第12枝篇の第871, 72行)とあり、ルナールとティベールの役割が反対になっている。

<sup>41</sup> 祈願や祝福の前には、典礼上の挨拶が交わされるのが通例だった。その先唱句は、ティベールが上に言ったように「Dominus vobiscum 主は汝と共に」、応唱句は、「Et cum spiritu tuo また汝の霊と共に」。なお、B 写本(本翻訳の底本)とE 写本では、「Dominus vobiscum」の vobiscum が vobiscon になっている。

<sup>42</sup> "per omnia (saecula saeculorum)"

<sup>43</sup> "benedicamus (Domino)"

<sup>44</sup> 原文は、「a ogre, a treble et a deschant」。«ogre (= fr.mod. orgue)» は、音楽形式としてのオルガナムを指す。9世紀に起こった多旋律音楽の原形で、はじめは主声部に対して対声部が四度あるいは五度下で、一音対一音の形で平行していく二声オルガナムという形が中心だったが、12世紀後半にペロティウスが三声部や四声部の作品を作曲したことで、最高潮を迎えた。『狐物語』第12枝篇が書かれたのはちょうどこの時代にあたる。「treble」は「トリブルム」と訳されるが、多旋律音楽で言うところの第三声部(三声の場合は最高音部)を指す。ルナールが第三声部だけを歌ったとすれば、多旋律音楽は実現されないで、「a treble」を「三声部を持った」という意味でオルガナムを修飾して

- 12344 <sup>ベネディカームス</sup> 我ら主ヲ賛美シ奉ランが[ルナールの口から]出て来ますが、  
12345 ルナールの熱演の様といえば、  
12346 世の中の、どんなに元気な者も病気の者も  
12347 もし、ルナールが歌うのを聞いたとすれば、  
12348 自分のことよりも彼を憐れに思わないような  
12349 人はないほどです。  
12350 ルナールが豊かに歌い上げるのを聞けば、  
12351 誰もが飽き飽きとしてしまうでしょう。  
12352 なにせ彼が歌い終わるまでに、  
12353 歩こうと思えば二里は進めるでしょうから。  
12354 ティベールは戸を閉めて来ましたが  
12355 歌うことに疲れておりました。  
12356 <sup>デオ・グラチアス</sup> 「神ニ感謝<sup>45</sup>」と述べました。  
12357 その後、二人で終課を歌い、  
12358 何もかも終わらせてしまうと、  
12359 互いに議論を始めました。  
12360 まず、ルナールが話します。  
12361 「ティベールの旦那、(とルナール。)  
12362 この町に君と留まるとして、

---

いるものとり、ルナールが全てのパートを歌っていると解釈する。「deschant」は、ディスクアントゥス形式を指す。各声部が1音符対1音符の同一リズムによって動く形式の対位法で、次第に高音になっていく声部と次第に低音になっていく声部が交叉する形式のことである (J. Chaillay, *Histoire musicale du Moyen Age*, Paris, Presses universitaires de France, 2<sup>e</sup> édition, 1969, pp. 69-74, 107-110 を参照)。直訳すると「第三声部をもったディスクアントゥス形式のオルガナムで」ということになるが、これを意識した。数行下の「もし、ルナールが歌うのを聞いたとすれば、自分のことよりも彼を憐れに思わない人はないほどです。」というのは、この大道芸のような無理のある歌い方について言っているものと考えられる。

<sup>45</sup> 聖務日課の終わりに唱えられるベネディカームスは、先唱句 "Benedicamus Domino 我ら主を賛美し奉らん" と応唱句 "Deo gratias 神に感謝" からなる。すなわち、ルナールは、わずか八音節の先唱句を(「二里進める」を文字通りにとればだが)二時間程度かけて歌ったことになる。数行上の「誰もが飽き飽きとしてしまうでしょう」は、唱句がオルガナム形式で歌われるとあまりにも時間を要することを皮肉ったもの。

- 12363 儲けの全体の  
12364 どの程度が僕のものになるか知りたい。  
12365 教会税としての豚や、  
12366 ひな鳥や、子牛や、  
12367 雌羊や鶯鳥のひなのことだけれど。  
12368 どうやって分配するか、言いたまえ。  
12369 お供えものや、牛乳について  
12370 僕がどれだけ分け前をもらうか  
12371 落ち着いて決めて言ってくれ。」  
12372 「どれも、四分の一ずつだ。  
12373 賛同が得られればの話だが。」とティベール。  
12374 ルナールはしかめ面をします。  
12375 「なんだって、畜生。(とルナール。)  
12376 俺が、今日の晩課で  
12377 お前と同じ位にうまく歌わなかったとでも？  
12378 同じ身分の者として、信仰心においても、  
12379 生まれも、人としての値打ちもお前と変わらない。  
12380 俺が、お前よりも馬鹿者だなどということがあるか。  
12381 お前と同じだけ  
12382 教会税も  
12383 お供えも貰えないとは。」  
12384 「ルナール、君は僕を馬鹿にしている。  
12385 誓って、ルナール君、はっきりと言っておくれ。  
12386 まだ君はあまり僕に仕えてくれていないし、  
12387 もう、僕のところから立ち去ろうとしている。」  
12388 「誓って、そんなことはない。むしろ聞きたい。  
12389 ここに留まるのが良いと言うのなら、  
12390 何をあてにできるかということ。」  
12391 「もし、誠実に振舞ってくれるのなら、  
12392 誠心誠意、約束しよう。

- 12393 僕が得たものの  
12394 半分を君に分けよう。  
12395 死者も、生者も、偶然の出来事も  
12396 施し物も、墓も。  
12397 だから、いい友達でいてくれ給え。」  
12398 「では、約束しよう。(と、ルナル。)  
12399 だが、本当にえらく腹がへっている。」  
12400 「パンが欲しいのなら、  
12401 祭壇の脇の一つあるよ。」  
12402 「生まれてこの方(と、ルナル。)  
12403 こんなに旨いのは食べたことがない。  
12404 だが、チーズは一かけらもないのかい？」  
12405 「誓って、知らない」とティベール。  
12406 その時、上に目を向けましたが、  
12407 布巾が包まれた状態で  
12408 窓のところに置かれているのを見えました。  
12409 チーズが二つくるまれています。  
12410 うち一つは、真新しく、半ば湿っています。  
12411 ティベールはそいつを布巾から引き出しました<sup>46</sup>。  
12412 「なんてこった。上等じゃねえか。  
12413 それぞれ、取り分があるってこった。」  
12414 「誓って、(とルナル。) こいつはいい。  
12415 だが、その柔らかいのを僕にくれたまえ。」  
12416 「なんだって。おかしくなりたいというのか<sup>47</sup>。

---

<sup>46</sup> テキストには書かれていないが、ティベールは窓のところまでよじ登ったものと思われる。

<sup>47</sup> Ph. Walter によると、シエナのアルデブランダン (Aldebrandin de Sienne) による医学書のフランス語訳 (13 世紀) には、チーズと狂気の関係が書かれているということである。これによると、チーズは、胃に気 (humeurs, vents, 現在の科学ではガスととらえられるものであろう) を生じさせ、食べる者を太らせる。また、チーズによって生じた気は、古代医学にいわれる四体液の一つである黒胆汁を発生させる。この黒胆汁が蒸気として脳に上り、憂鬱 (狂気と同一視された) を引き起こすのである。この医学書



- 12417 （とティベール。）ルナールの旦那、  
12418 この硬いのが君の分だ。  
12419 これは、気を確かにするのにいいから。  
12420 これ[=硬いチーズ]を取り分にしたいと望む者は  
12421 [柔らかいのを取り分とした]者よりも長生きするというもの。」  
12422 「そんなもの、食べ物入れに入れたくない。  
12423 （とルナール。）そっちをくれたまえ。」  
12424 「俺の首にかけて、食わせないぞ。  
12425 （とティベール。）多かろうが少なかろうが。」  
12426 「畜生、（とルナール。）  
12427 それじゃ、だまし討ちじゃないか。」  
12428 「好きなところへ行ってしまえ、阿呆のごろつきが。  
12429 明日の晩に、この柔らかいのをあげるから。」  
12430 「馬鹿にしやがったな、  
12431 （とルナール。）俺の信心にかけて言うが、  
12432 お前さん、誓いを破りやがった。  
12433 ルーアンの  
12434 信心会修道院長の  
12435 ユオンのお膝元に訴えてやるぞ<sup>48</sup>。

は、アラブ社会を経由してヨーロッパにもたらされた古代ギリシア医学の影響を強く受けており、民間医療法ではなく、当時最先端の医学理論であった（Ph. Walter, 前掲書, pp. 8-11 を参照）。シエナのアルデブランダンテキストには、新しいチーズと古いチーズとでは、後者の方が熱を多く発するため、悪い気が大きくふくらむのだとされている。本テキストの作者がこのことを念頭に入れていたとすれば、全く反対のことをティベールに語らせているということになる。

<sup>48</sup> Ph. Walter によると、この部分は恐らく、ルーアンに実在した団体を指すということである。中世末期にコルナル（Cornards「寝取られ亭主たち」）あるいはコナル（Conards「馬鹿者たち」と呼ばれて、祝祭日に道化た行いを繰り広げたという記録が残っているこの団体の前身は、それ以前にはコクリュシエ（Coqueluchiers「百日咳患者たち」）と呼ばれて、昇天祭前の三日間に繰り広げられる豊熟祈願の祭り（ちょうど、この作品の舞台になっている五月頃に行われる）に様々な衣装を着て登場した。互選、あるいは選挙により選ばれた長は「修道院長（abbé）」と呼ばれて、僧帽、司教杖を身にまとわれた。このような団体は祝祭時の冗談ごとに過ぎないといえるが、その存在はルーアンの町に限られたものではない。都市における道化社会や、祝祭の構想を担当する若者たちと深い関係があるのだろう。（Ph. Walter, 前掲書, p. 8 を参照）

- 12436 ルナルがティベールを責める間に  
12437 ティベールは大急ぎで  
12438 チーズを食べてしまいました。  
12439 そのため、ルナルは大いに嘆きました。  
12440 [チーズが手に入れば]望むところだったのでしょうが、  
12441 他にやりようがありません。  
12442 口を開かず、音もなく言いました。  
12443 「もし、今日お前に復讐できないのなら、  
12444 本当に腹立だしいことだろう。」  
12445 そして、自分のチーズに口をつけました。  
12446 とても腹が空いていたのです。  
12447 好きなだけ食べます。  
12448 十分に食べてしまうと、  
12449 残りを懐に結わえつけます。  
12450 家に持って帰るのです。  
12451 でも、食べている間、  
12452 ずっと考えを巡らせていました。  
12453 どうやってこれほどの悪事を働いた  
12454 ティベールを陥れようかと。  
12455 そして、ティベールに話しかけます。  
12456 「猊下よ、悪し様に言って  
12457 申し訳ありませんでした。  
12458 こんなものは食べたことはありません。  
12459 チーズは大変美味しゅうございました。  
12460 こちらを私に与えますとは、  
12461 賢く配分されたものです。  
12462 しかし、気にかかることがあります。  
12463 今宵、我々は失念してしまいました。  
12464 晩課にも、終課にも  
12465 鐘を鳴らしませんでしたね。」

- 12466 「本当だ。ジル聖人<sup>49</sup>に誓って。」  
12467 ルナールは言いました。「さあ、  
12468 紐のところに行って、引っ張りましょう。」  
12469 さて、二人は紐のところまで来ました。  
12470 知恵に長けたルナールは、  
12471 まず自分が鐘を鳴らしましょうと言って  
12472 紐にしがみつきます。  
12473 ですが、地面からは鳴らすことができないので、  
12474 腰掛けに上らなくてはなりませんでした。  
12475 紐でもって輪差<sup>50</sup>を作って  
12476 首の周りにかけます。  
12477 一緒に足を二本前にくぐらせます。  
12478 ティベールは彼のことをじっと見えています。  
12479 彼は歯で紐をとらえて  
12480 がんがんと鳴らして人々を起こしています。  
12481 寝ていた者も起きてしまいます。  
12482 しかし、紐は  
12483 締まらない仕組みになっていました。  
12484 というのも、ルナールはあまりに悪事に長けており  
12485 歯で紐[が締まるの]を抑えていたからです。  
12486 ティベールはこのことに気が付かずいました。  
12487 てっきり、一緒にくぐらせた二本の足で  
12488 鳴らしているものだと思っていたのです。  
12489 [ルナールは]十分に鳴らすと  
12490 大変上手に紐から身を離しました。  
12491 ティベールは言いました。「さて、今度は

---

<sup>49</sup> 中世においてジル聖人 (saint Gilles) は、狂人・道化 (fous) の守護聖人であった。一般名詞の «gille» が「欺瞞」や「裏切り」を表すことと、狂人・道化は「ほら吹き」という通念があったことによる。(Ph. Walter, 前掲書, p.3を参照)

<sup>50</sup> 輪のように結んだ紐。引くと締まる。

- 12492 俺が鳴らす番だ。」
- 12493 ルナルは言いました。「リキエ聖人に誓って、
- 12494 望むのだが、下手糞に鳴らした方のおごりで
- 12495 一スティエ<sup>51</sup>のワインを飲むことにしよう。
- 12496 断る者は呪われてしまえ。」
- 12497 ティベールは言いました。「そうしようではないか。」
- 12498 そして、足で飛び跳ねて
- 12499 腰掛けの上に上りました。
- 12500 紐に足を差し込んだ後に
- 12501 首も中に突っ込みます。
- 12502 (私が思うところ) 馬鹿なことをしたと思うことでしょう。
- 12503 歯で紐をとらえます<sup>52</sup>。
- 12504 その時、こんな風に鐘を鳴らすのは一体誰かと
- 12505 人びとが教会を見にやって来るのが
- 12506 見えます。
- 12507 さて、ルナルはティベールに話しかけます。
- 12508 「お前さん、[さっきは]幸運にも柏の木に上っていたね。(と彼。)
- 12509 そこで、あの司祭がお前を見つけたわけだが、
- 12510 そいつが、お前をここに送り込んだというわけだ。
- 12511 言ってくれ、喜ばしいことではなかったかね。」
- 12512 ティベールが「はい」と言おうとして
- 12513 口を開いた時、
- 12514 紐が彼の首を
- 12515 二本の足をもち共に締め付けました<sup>53</sup>。
- 12516 騙されてしまったというわけです。

---

<sup>51</sup> 一樽を意味する 1 ミュイ (muid) の 36 分の 1。

<sup>52</sup> ティベールは、ルナルの術策に気がつかなかった (第 12486 詩行) とあるが、ルナルと同様に歯で紐を噛むことで、紐が締まるのを防いでいるのである。

<sup>53</sup> 返事をさせて口に咥えたものを離させるのは、『狐物語』第 2 枝篇におけるシャントクレール (雄鶏)、チェスラン (鳥) のエピソードで使われているのを同じ術策である。

- 12517 もしも、足を引き抜いてしまったら  
12518 すぐさま首吊りになってしまったことでしょう。  
12519 足で紐を広げていたのですから。  
12520 ルナールは言いました。「大丈夫か？」  
12521 全然うまく鳴らせないじゃないか。  
12522 じっとしている。教えてやるから。」  
12523 ティベールは、彼が本当のことを言っていると思いますが、  
12524 ルナールは、かつて本当のことを言ったことがないのです。  
12525 紐から彼を助け出すべきところを、  
12526 足元にあった  
12527 腰掛けを引き抜いてしまいました。  
12528 そうなるとティベールは、余計に締めつけられます。  
12529 もう、身を支えるものがないからです。  
12530 ずっと鐘を鳴らしております。  
12531 逃れられるかと思った時に  
12532 ルナールは彼をからかい始めます。  
12533 彼に向かって歩み始めて、  
12534 「ははは、もう十分だ。(と彼。)  
12535 ティベールの旦那。もう夜ではないか。  
12536 何だというのだ？ 今日は[鳴らし]止めないのか？」  
12537 ティベールは、うなり始めます。  
12538 「何だというのだ？ 僕には返事してくれないのかい。  
12539 (とルナール。) 高慢ちきのこんこんちき。  
12540 お前さんが何を言っても聞こえないふりをしてやろう。さもなくば、  
12541 お前さんの目玉が災難に遭いますように。  
12542 寝たふりをしやがって。  
12543 俺が話しかけているというのに、  
12544 何も言おうとしない。  
12545 俺とは話なんかできないというのだろう。  
12546 何だというのだ？ つまり、神様のおわします高みに

- 12547 上ろうとしているというのか？  
12548 何てこった、ティベール。冗談ごとでは済まないぞ。  
12549 そんな風にして雲まで上るものではない。  
12550 そういう馬鹿げた考えはどこから来たのか？  
12551 十分に聖性を備えているから  
12552 聖人たちと一緒に行ってしまいたいとでも？  
12553 俺をここに一人で置き去りにしようってか？  
12554 お前さん、栄光に包まれてもうあの世に行くというには  
12555 まだあまり神にお仕えていないぞ。  
12556 お前さん、今晚、祭り<sup>54</sup>の晩課で  
12557 告解をしていないじゃないか。  
12558 俺とは話そうとせずに  
12559 上の方ばかりを見つめやがって、  
12560 頭が痛いに違いない。  
12561 何故、それほどまでに俺が憎いのか？  
12562 俺は神を一度も裏切ったことはないのに  
12563 俺と話そうとしないとは。  
12564 お前さん、忠誠の誓いを破りやがった。  
12565 それも二回だぞ。  
12566 この度もそうだし、後一回は山分けの時。  
12567 お前がチーズを分けた時のことだ。  
12568 賢く振舞っていないね。  
12569 サムソン聖人に誓って言うておくが、  
12570 お前のことを阿呆な野郎だと思っているよ。  
12571 まだ、そうでありたいと思っているのだろうが、  
12572 俺を見下ろした時ほどの  
12573 威厳が今のお前にあるとは思わない。

---

<sup>54</sup> 動物たちによる晩課は「愚者の祭り」の一部であったと、登場人物自身が語っている  
のである。

- 12574 何冊も本を積んで運ぶ  
12575 馬にお前さんが乗っていた時のことだ。  
12576 司祭を騙して盗んだ  
12577 本と若駒のことだよ。  
12578 今や、泥棒のように吊り下がっているが、  
12579 縄帽子までかぶっていやがる。  
12580 で、俺がお前さんに対して起こした  
12581 訴えは、今後どうなるんだ？  
12582 出廷する件は、どうなるんだ？  
12583 行くことが出来ないのだから、  
12584 三週間か、少なくとも一月は  
12585 尼僧信心会に  
12586 [裁判を]延期してもらおうことだな。  
12587 どうするつもりか言ってくれ。  
12588 神に誓って、貧しき人びとの師となるには  
12589 お前さんはあまりに傲慢すぎる。  
12590 人びとを管轄下におけば  
12591 悪く彼らを導くことだろう。  
12592 彼らがお前を待ち望むなどということを  
12593 マリアの息子である神がお喜びにならないように。  
12594 酷い見返りを受けることになるだろうから。  
12595 お前さん、彼らに話しかけようもしないし、  
12596 訴えをこまめに聞くこともしないだろうから。  
12597 今、あの扉を開けるとしよう。  
12598 外に、人びとがやっ来ていて  
12599 教会の中に入りたがっているのが聞こえているよ。  
12600 もう詩篇集を  
12601 膝の上に広げていなければならないというのに、  
12602 お前さん、三つの結び目をもって  
12603 縄に首を縛られているじゃないか。

- 12604 ここでは、機転が利かなかったというわけだ。  
12605 立派な方々はどう言いなさるか？  
12606 昨日やっていたように  
12607 ローマの典礼に則って歌っていないね。  
12608 昨日言い及んでいた七学科を  
12609 よく知っている筈なのに  
12610 紐から身を放つことができずに、  
12611 気が変になってそんなにたくさん鐘を鳴らしている。  
12612 もうこの鐘々には  
12613 構わずに放っておくべきだろう。  
12614 やっても仕方がないような  
12615 仕事にかかずらう位なら  
12616 泥鰌掬いでもやっておいた方がましだろう。  
12617 本当はこんなことをやるべきではなかったのだが、  
12618 教会管理人の仕事をする事で  
12619 威張って見たかったのだろう。  
12620 全く阿呆なことをしたものだ。  
12621 きっぱりと言っておくが  
12622 誓って、お前はあまりに傲慢だ。  
12623 贖罪のために  
12624 妻を明日お前のところに来させようと  
12625 シモン聖人に誓って思っていたのだが、  
12626 [来たとしても彼女は]供え物をお前の手に  
12627 届かせることも渡すことも、  
12628 お前のきれいな手に口づけることもできないだろう。  
12629 あんまり高いところに上っているものだから。  
12630 [妻は]お前を狂った悪魔だと思って  
12631 大いに恐れることだろう。  
12632 ところで、一ドゥニエを二枚のマイユ銅貨に  
12633 両替して頂けませんか？



- 12634 送りたいところがあるので。  
12635 どうしてもらえますでしょうか？ やって頂けるでしょうか？  
12636 聖マリア様に誓って、分かったでしょう、  
12637 奴がもう口を開いてくれるかどうか<sup>55</sup>。  
12638 お前さん、悪く振舞うことだろうよ、  
12639 貧しい人に対して。俺に対して  
12640 誠実な仲間であろうという  
12641 誓いをたてたのにも関わらず  
12642 いまだに口を開こうとしてくれないの<sup>56</sup>。  
12643 だけど、思うのだけれど、これから先は、  
12644 一言一言、全部聞いてくれるというのだろう。  
12645 僕がお前さんに言うことをね。多分。  
12646 神に誓って、猯下よ、お願い致しますが、  
12647 何も恨みに残さないでください。  
12648 あなたが怒ったり、苦しんだりすることを  
12649 私は全然望んでいないのですから。  
12650 あなたは、私に分け前にあずかることを嫌がっておられましたか  
12651 馬に積んであったもの全ての中から[なにがしかを]  
12652 [産後の]ミサを授かるエルムリーヌのために  
12653 持ち出すことに取りかかってよろしいでしょうか？  
12654 彼女は、決してあなたに意地悪ではなかったので、  
12655 喜んでお与えになるに違いありません。  
12656 ろうそくのうちのいくつかに火を灯しても下さることでしょ。う。  
12657 彼女に頂けるでしょうか？ 麗しく優しき猯下。

---

<sup>55</sup> 仮想の第三者への台詞。

<sup>56</sup> M. Roques 校訂の B 写本のテキスト «Malement feriez vos or / a un povre home, qant a moi, / a qui vos estes par vo foi, / demener loial compaignie / ne devriez encore mie.» の最終詩行は意味をなさないで、A 写本から校訂した E. Martin のテキスト «Ne deigniez encor parler mie.» (éd. E. Martin, *Le Roman de Renart*, 2<sup>e</sup> vol., Strasbourg, Trübner, 1885, branche XII, v. 1184) を借りた。

- 12658 よろしいですか！ 神様があなた[の傷（＝損失）]を癒しますように。  
12659 神の意には適いましたが、あなたにはお気の毒なことです。  
12660 彼女は、バーチル・ノスチル主ノ祈りを唱えて  
12661 神様が今年のうちにあなたに恥をかかせるようにと祈るでしょう。  
12662 聖ヨハネの祝日<sup>57</sup>がやって来る前に  
12663 再び災いがあなたに降りかかるでしょう。  
12664 猊下よ、災いが降りかからぬように気をつけて。  
12665 私は、進んであなたに話しているというのに、  
12666 私には話そうとしないだなんて、  
12667 本当に鬱陶しい方ですね。  
12668 まだ、鐘を鳴らしていただきたいのでしょうか？  
12669 言っておきますが、狂気の沙汰ですよ。  
12670 意地悪なことに思えます。」  
12671 さてや、ルナルは嘲りを止めました。  
12672 というのも、屈強でむくつけき大男の村人が  
12673 扉のところで覗き込んでいるのが見えたからです。  
12674 がつつと大胆な様子は兎のようで<sup>58</sup>、  
12675 脇には剣を帯びていましたが、  
12676 剣はすっかり錆びに覆われていて、  
12677 鞘から取り出すことはできないのです。  
12678 彼の力で引き抜かれることは決してないでしょう。  
12679 猫のティベールが  
12680 鐘を強く打ちつけており、  
12681 また、ルナルがその横にいるのを見ると、

---

<sup>57</sup> 夏至（6月24日）にあたる。

<sup>58</sup> 兎は本来、体の力に劣る動物なので、一見文脈に矛盾するが、直後の第12675-78行がそうであるように、提示の部分で強いものを想起させておいて、後から卑小化するというコミックであろう。実際に、第12680-84行では、この村人が正体不明の動物たちを見て恐怖のあまりに兎のように逃げ出したとある。また、『狐物語』の他の枝篇では、兎のクアールに軍団の指揮者を勤めさせたり（第11枝篇）、村人を捕らえて臣下の礼をとらせたり（第17枝篇）という喜劇が用いられている。

- 12682 あまりに恐ろしく、当惑したもので、  
12683 さっと熱が出て  
12684 兎のように素早く逃げ出しました。  
12685 ルナルが前に進み出て  
12686 彼に言います。「止まれ、止まれ！」  
12687 そう聞くと、彼は気が狂いそうになりました。  
12688 決して立ち止まらずに、  
12689 丘の上にある町の中までやって来ました。  
12690 大変に悪賢いルナルはというと、  
12691 教会に引き返して  
12692 詩篇集から一葉を引き抜くと  
12693 懐の中に押し込みました。  
12694 ティベールに話しかけます。  
12695 「ティベール殿、（とルナル。）  
12696 言っておきますが、（神よ、ご照覧あれ。）  
12697 私は決してあなたと一緒に留まりませんよ。  
12698 えらく信心深いことですか。  
12699 神様のために、本当によくお仕えできるものです。  
12700 私なら、そんなに夜更かししていることはできません。  
12701 もう行ってしまいますよ。あなたはここに留まって  
12702 お供え物を受け取ることです。  
12703 柔らかいのであれ、硬いのであれ。  
12704 誓って言いますが、猊下、  
12705 私は、半分であれ、四分の一であれ関心がありません。」  
12706 [そう言うと]ルナルは、立ち去ってしまい、  
12707 真っ直ぐに垣根のところに向かいます。  
12708 ティベールは、鐘を鳴らすことで  
12709 疲れきっており、  
12710 もう少して気を失うところです。  
12711 もう十分な立ち働きはできませんでした。

- 12712 ルナルよりも先に  
12713 教会から立ち去った村人とはいえば、  
12714 二十人を優に越えるいきり立った村人たちに  
12715 間もなく出会っていました。  
12716 こぞって、彼に話し出します。  
12717 「今日、あの教会に行ったと？」  
12718 「おう、(と彼。) 悪魔を一匹  
12719 見たっさ。確かなことばい。  
12720 こっから先には行きなんな。  
12721 悪魔の一匹紐にぶらさがるとるばい。  
12722 作り話と思わんとって。  
12723 その隣にもう一匹いたっさ。  
12724 分かってつかーさい。奴らのせいでえろうに戸惑うたばい。  
12725 なしてって、わしが中に入ろうと思ひよったところ、  
12726 あいつら、わしに叫びだしたっさ。  
12727 わし、兎のごたる逃げ出したばい。  
12728 すぐに熱が出て、  
12729 他にも、もうたくさんくらいの病気になったたい。  
12730 苦しかったあ。  
12731 ほん先も、まだやつ [=悪魔] がつきまとうていたっさ。」  
12732 「後からついて来んね。」と彼ら。  
12733 さてや、熱にうかされていた  
12734 村人は踵を返しました。  
12735 彼ら [=他の村人たち] と教会に向かいます。  
12736 彼らに話しかけました。「リキエ聖人に誓うて言うが、  
12737 わしを信じるのなら、入りなんな。  
12738 悪魔の直立しとるけん。  
12739 首も、足も  
12740 紐に結わえられておると。」  
12741 「しゑからしかあ。(と一人が答えました。)

- 12742 前進せよ、(と彼。)勇敢な戦士<sup>59</sup>たちよ。」  
12743 そこで、彼らは教会の中に来ました。  
12744 恐れおののく村人は  
12745 ずっと後ずさりしていきます。  
12746 彼はたいそう臆病なのです。  
12747 他の者どもは共に前に進みました。  
12748 ティベール殿が紐に  
12749 ぶら下がっているのを見ると  
12750 お前は良いものなのか悪いものなのか  
12751 本当のことを言ってくれ、とお願いします。  
12752 彼は、そうだともしも違っても答えません。  
12753 彼らは、再び話しかけて  
12754 もう一度、お願いしました。  
12755 彼はうんともすんとも答えません。  
12756 「三回目になるが、(と数人。)  
12757 もう一度、こいつにお願いしなければならない。  
12758 もしも、我々に話そうとしないのならば  
12759 勇敢に襲いかかろうではないか。」  
12760 そういつて、すぐさま再び駆け出します。  
12761 勲高く勇敢な若者[／盾持ち]<sup>60</sup>が  
12762 大きく踏み込んで、彼らの前に飛び出て  
12763 彼[=ティベール]に言いました。「そこでぶら下がっているお前、  
12764 皆を代表してお前に願う。

<sup>59</sup> «baron hardi». 古仏語の «baron» には、「領主」「(高貴な)戦士」「勇敢な者」「(妻から見た)夫」「妻を寝取られた夫」の意味がある。村人を指す場合、この言葉は本来「勇敢な者」より後の意味を持つことになるが、この箇所は武勲詩のパロディーであると考えられるので、「戦士」と訳した。また、『狐物語』の各枝篇に通底する主要テーマが姦通を原因とするルナールとイザングランの紛争であることを思えば、「戦士」という表の意味の陰には「寝取られ亭主」という意味が見え隠れする。

<sup>60</sup> «bachelier» の本義は「盾持ち」であるが、若者がこの役を務めることが多いことから、「若者」の意味が派生した。村人が武勲詩の戦士の役を演じるこの場面では、両方の意味を併せ持つと考えられる。

- 12764a また、我らが主である神のみを別として  
12764b それ以上に高貴な方を知らぬ  
12764c ローマ教皇の名代としてでもある。  
12764d 願わくは、もしお前が<sup>61</sup>  
12765 人びとと話するような者であれば、  
12766 早く私に話しかけてくれ。  
12767 お前が信ずること、お前の信仰についてだが、  
12768 お前をお願いする、(これは、フランス王と  
12769 彼が仲間として率いる  
12770 家臣の全て、  
12771 そしてイギリス王<sup>62</sup>、  
12772 また、森や、草地や、大地全体といった  
12773 全ての被造物の名代としてであるが)  
12774 お前の目、お前のありようについてだが、  
12775 お前は神の手によるものか、私に言いなさい。  
12776 さもなければ、私を生ましめた者に誓って  
12777 お前は、完全に八つ裂きになることだろう。  
12778 ここに鋼の剣が目に入らぬか？」  
12779 「仕方がない。(他の者どもが応じます。)  
12780 前進せよ、(と彼ら。) 恐るべき戦士たちよ。  
12781 左右から奴に襲いかかろう。」  
12782 ここに、司祭の情婦が現れて<sup>63</sup>、  
12783 狂ったように彼[=ティベール]に襲いかかります。  
12784 「お前、(と彼女。) この教会を

---

<sup>61</sup> 以上4行は、M. Roques によるL写本からの補填。

<sup>62</sup> 村人がイギリス王とフランス王という二人の主君に言及しているという点で、ノルマンディーのフランスへの併合(1204年)以前に書かれたテキストであることを示す。第12枝篇の成立年代を測定する手がかりの一つ。(L. Foulet, *Le Roman de Renard*, Paris, Champion, deuxième édition, 1968, p. 111 以下を参照。)

<sup>63</sup> 提示の表現である«A tant es (vos)»が用いられているが、これは、武勲詩で新たな戦士が登場する際に多用される表現である。

- 12785 見つけよったか？ 運の尽きばい。  
12786 これは、私の旦那のものだっちゃ。  
12787 思い知らしてやるばい、(神さま、助けてつかーさい)  
12788 この糸巻棒が欠けない限りは。」  
12789 糸巻棒を持って襲いかかります。  
12790 したたか背中を打ちすえます。  
12791 ティベールは飛び上がりますが、  
12792 無駄です。どうにもなりません。  
12793 彼らから逃げ出すことはできないのです。  
12794 その時、勇敢な若者[／盾持ち]が、  
12795 (剣を抜き払っていた人のことですが)  
12796 猛々しく襲いかかります。  
12797 彼[＝ティベール]に長い間、願いを述べていたこの男は、  
12798 すぐさま、彼に向かって行きます。  
12799 腕に袖を  
12800 幾重にも巻き上げて、襲いかかります。  
12801 十字を切って、前に進み、  
12802 身を引きながら一撃を見舞います。  
12803 毛皮の鎖<sup>64</sup>を  
12804 打ちすえ、捻じ曲げ、ばらばらにします。  
12805 あまりに勢いよく打ったので  
12806 地面に防具の一部[／わき腹の皮]<sup>65</sup>が落ちました。  
12807 しかし、肉までには至りませんでした。  
12808 少し剣が滑って  
12809 それで地面に落ちてしまったのです。  
12810 大した損害は与えられませんでした。  
12811 「俺の剣の切れ味を見ろ。  
12812 少しそれることがなかったなら、

<sup>64</sup> ティベールの毛皮を戦士の鎖帷子にみたてているのである。

<sup>65</sup> «pan» には、「防具の一部」と「わき腹の皮」の意味がある。

- 12813 復讐を遂げられたであろうに。」  
12814 その時、村人が一人、槍を持って飛び出します<sup>66</sup>。  
12815 彼もまた挑みかかります。  
12816 両手で、それ[=槍]を振り回し、  
12817 体の真ん中を打ちすえようとなりました。  
12818 しかし、ティベールは逃げる術をよく知っていました。  
12819 村人は、向こう側に越してしまいます。  
12820 石につまずいて  
12821 こけたのですが、槍が折れて  
12822 わき腹に突き刺さってしまいました。  
12823 力を回復して  
12824 すっかり勇気を取り戻した  
12825 若者[／盾持ち]は剣を手にして  
12826 素早く彼[=ティベール]に襲いかかります。  
12827 若者の名はギョームといいました<sup>67</sup>。  
12828 兜を打ったかと思いましたが、  
12829 この一撃には失敗しました。  
12830 ティベールがかわしたのです。  
12831 この一撃は彼に届かず、  
12832 剣は両の拳の間で折れてしまい  
12833 根元が残ります。  
12834 首を打ちすえますが、  
12835 彼[=ティベール]を絡めとらえていた紐が  
12836 この一撃で切れました。  
12837 ティベールは落下しますが、大変疲れていたので  
12838 大急ぎで逃げ出します。  
12839 村人は驚いて

---

<sup>66</sup> 村人たちは、ティベールに一騎打ちで挑みかかっているのである。ここにも武勲詩のパロディーが認められる。

<sup>67</sup> 武勲詩の英雄であるギョーム・ドラングュに由来するのであろう。



- 12840 扉の間から飛び出します。  
12841 彼を殺そうと躍起になっていたからです。  
12842 彼ら[=他の村人たち]に叫びます。「おい、急いで後に続け。」  
12843 間近に厳しく追いたてますが、  
12844 彼[=ティベール]は全然恐れませんが、  
12845 というのも、夜の闇は暗く、  
12846 これから起ころうとする  
12847 出来事を彼ら[=村人たち]に見失わせたからです。  
12848 彼[=ティベール]が死ぬ筈がありませんでしたから。  
12849 今や村人たちは引き返します。  
12850 ティベールは、彼らを呪い続けます。  
12851 村人たちのこと、司祭の情婦のこと、  
12852 彼らのあり様のことの全て、  
12853 それからルナルのことを呪い、とぼとぼ歩きます。  
12854 ティベールが歩んでいきますと、  
12855 ルナルが彼の正面、行く手にやって来ました。  
12856 「クレマン聖人の名において、  
12857 いやはや、(と彼。)良き司祭殿、  
12858 供え物を分けて下さいよ、  
12859 お願いだから。麗しくとても優しき殿よ、  
12860 父なる神があなたの[傷を]癒しますように。  
12861 あなたの生業について話して下さい。  
12862 あなたの修道会に入りたいと思っているのです。  
12863 お美しい首にかかった  
12864 その袈裟があなたにあんまり似合っていますので。  
12865 だけど、神に誓って、猊下、それを着せた人は  
12866 本当に馬鹿なことをしたものです。  
12867 まるで、盗人を吊るす  
12868 首吊り縄のようではありませんか。  
12869 「ルナルよ、(と猫のティベール。)

- 12870 お前のべてんにも、お前の誓いにも  
12871 災いあれ。」  
12872 「私に言っているのですか？（とルナル。）」  
12873 「確かにそうだよ。」とティベールが答えました。  
12874 「何がお気に召しませんかな、  
12875 ティベール殿。（とルナル。）  
12876 文句はありませんから、全部とっておいて下さい。  
12877 あなたの供え物を全てお持ちになればよい。  
12878 これで、報酬は十分ですか？  
12879 今日、あなたは[獲物を]分配して[取り分を]取りましたが、  
12880 間違いを犯しました。  
12881 福音書の朗読の際にあなたといた人が  
12882 何も分け前に与らなかつたことです。  
12883 あなたの良き相棒のルナルのことですよ。  
12884 だけど、姿勢を正して、よく聞きなさい。  
12885 この手紙の中に何かあるかということを。  
12886 修道院長のユオン殿が  
12887 今私に送ってよこしたのです。  
12888 あなたに、月曜日、食事の前に  
12889 ルーアンに来るようにと命じています。  
12890 ブレイユの司祭に対して  
12891 抗論する準備をすっかり整えておけとのこと。  
12892 彼は、こちらの紙に  
12892a 書きたいだけのことを全て書いています。  
12892b 今、私にことづけさせたのですが<sup>68</sup>、  
12893 もし、あなたがよく信じられないというのなら、  
12894 前に進んで、見てみなさい。  
12895 手紙にはまだ、私が言わなかつたことも

---

<sup>68</sup> 以上二行は、訳者による A 写本からの補填。E. Martin による校訂本（前掲書）の第 12 枝篇の第 1445, 46 詩行にあたる。

- 12896 書いてありますよ。私の首にかけて。  
12897 あなたは教会に出入り禁止になっています。  
12898 もう、今年、数ヶ月間は  
12899 [聖務日課を]歌うことはできないと。  
12900 宣誓違反ニツイテ  
12901 大司教の前で、もしくは  
12902 司教御前の法廷で答弁するまでは。  
12903 ゴーチェ・ド・クータンス殿<sup>69</sup>に  
12904 判決をお任せしたのですよ。  
12905 [ブルーユの]司祭と私とで。嘘じゃありません。  
12906 共同してことを起こそうと思ったのです。  
12907 (とルナル。) こう言ってもよろしければ。」  
12908 すると、ティベールは殴られたりからかわれたりで  
12909 大変に辛い気持ちになりました。  
12910 悲しく、苦しく、うちひしがれました。  
12911 真っ直ぐに家に向かいます。  
12912 こうして、仲間たちは別れたと  
12913 終わりを迎える物語<sup>70</sup>は言っています。  
12914 ルナルはエルムリーヌのもとに向かいますが、  
12915 太った雛の鷺鳥に出くわして  
12916 家に持って帰りました。  
12917 食べ物をたいそう望んでいるだろう  
12918 妻に与えるためです。  
12919 彼女に全てを語りました。  
12920 ティベールが彼にどのような仕業をしたか、  
12921 どうやって、彼に訴えを起こしたか。  
12922 このようにリシャール・ド・リゾンはあなたがたに語っています。

<sup>69</sup> 1185年から1207年までルーアンの大司教を務めた実在の人物。

<sup>70</sup> 冒頭部に示されているこの作品のもとになったという物語。

- 12923 彼は、さる高官に捧げるために  
12924 このお話を翻訳しました。  
12925 彼はノルマンディーの人です。もし、彼が間違いを犯したとしても  
12926 もし、彼のお国言葉があったとしても、  
12927 彼は決して責められるべきではありません<sup>71</sup>。  
12928 阿呆に生まれた者は、決して賢くはならないでしょうし、  
12929 また、彼も自分の本性から逃げようとは思っていないのです。  
12930 神様はそんなことをお気かけはしません。  
12931 林檎はいつも林檎の木に生るものです。  
12932 これから先は語りたくありません。

---

<sup>71</sup> G. Roquesによると、第12枝篇(M. Roques版では第11枝篇)には、ノルマンディー地方独特の表現は特に認められないということである(«Les régionalismes dans la branches XI du *Roman de Renart*», in *Épopée animale, fable, fabliau : actes du IVe colloque de la Société internationale Renardienne*, Paris, Presses universitaires de France, 1984, pp. 481-88)。つまり、これは謙譲のレトリックに過ぎないということになる。